２０２２年９月４日聖霊降臨後第１３主日説教

申命記第 30 章 15－20 節
フィレモンへの手紙 1-20 節
ルカによる福音書第 14 章 25－33 節

８月３０日にわたしたちの信仰の先輩であり友である兄弟を天国にお送りいたしました。松田さんの天国における魂の平安と、地上におられるご家族の皆さまに、主の慰めがありますように、祈りたいと思います。

教会は、ともに主なる神様に祈り、『聖書』からともに学び、聖歌を歌うことを通してともに主なる神様を賛美する場所です。その中で、出会いがあり、交わりがあり、そして別れがあります。地上での様々な出会いと別れのほか、地上と天上との別れもあります。地上と天上との別れは、天上での再会までの一時的な別れです。イエス様を通して、教会に集められたわたしたちは、必ず天上で再会します。そのことをこれからもともに信じ続けていきたいと思います。

本日の旧約日課は「申命記」です。場面としては、出エジプトの最終段階、約束の地カナンに入る直前、主なる神様が全イスラエルに語り掛けるところです。主なる神様はまず、「**見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く**」（申 30:15）と述べて、二つの道を提示します。二つとは「命と幸いへ」の道と「死と災い」への道です。「命と幸い」の道に至るには「**主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守る**」ことが求められており（申 30：16）、「死と災い」の道に陥るのは、「**心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕える**」場合です（申 30:17-18）。

二つの道を提示するといっても、どちらを選んでもよいということではありません。２０節に「**あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる**」（申 30：20）とある通り、主なる神様は、「命と幸い」の道に至りなさいと命じているのです。

それは、命令ではありますが、主なる神様は、前者の「命と幸い」への道を選択することを、イスラエルに願っているともいえます。つまり、そこに示されているのは、自らの意思で「命と幸い」を選んでほしいと願う、主なる神様の愛に他ならないです。

出エジプトの出来事において、主なる神様が、ご自分の民であるイスラエルに愛を持って願うという表現に、違和感がある方も多いかもしれません。教会は、『聖書（旧約）』から、ユダヤ教を厳しい命令を下す主なる神様と、

それに従えなかったイスラエル、あるいは形式的に従っているイスラエルという関係を見てきました。しかし、そのような関係が、『聖書（旧約）』が示す主なる神様とイスラエルとの本質的な関係ではありません。また、ユダヤ教は、形式的に律法を守る宗教でもありません。本日の「申命記」の箇所にみられるとおりに、最初にあるのは、主なる神様の愛です。出エジプトという出来事をもたらしたことも、その旅の中でイスラエルを導いたことも、すべて主なる神様がイスラエルを愛されたことが理由です。そして、本日の二つの命令を提示したことも、イスラエルがその主なる神様の愛へ応えやすくするためです。律法を守るという行為の目的は、この主なる神様の思い、愛に応えるためです。それゆえに、「主を愛し、御声に聞き、主に従って」律法を守ると表現されるのです。

ここから、律法を守ること、その具体化が課題となるのですが、そこにまた落とし穴があります。律法違反ではないが、主なる神様を愛することの具体化とはことなる、つまり主なる神様の思いとはずれてしまう場合が起こりうるのです。

たとえば、熱心すぎるほどの積極的な律法順守は、排他的な自己肯定になる場合があります。あるいはまた、消極的に最低限律法を守ることというような、少しずる賢い律法順守も起こります。これらの現象は、主なる神様が与えた律法が、不完全だからではありません。人間の側が不完全であるため、生じたのです。それでも、「**主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守る**」ことを続けるのならば、必ず「命と幸い」に至る、それが『聖書（旧約）』の信仰にほかなりません。

本日のルカ福音書の物語において、イエス様も一つの歩み方を提示しています。それは、付き従ってくる群衆に対して語った言葉、「**もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない**」（ルカ 14：26）という部分に示されています。非常に衝撃的な言葉です。また、示された道は一つです。そのように歩むか否かという意味では、二つの道が示されているとも言えます。また、言い換えれば、それはイエス様の弟子となるか、弟子とならないかという選択です。しかし、ここにおいても、イエス様が求めているのは、弟子となることです。ただし、弟子になるにあたって、求められている行動が少し衝撃的です。憎むことが含まれているからです。

このイエス様の教えを、視点を変えて説明してくれるのが、本日のパウロのフィレモンへの手紙です。１章しかない非常に短い手紙ですが、この手紙は、１９節に「**わたしパウロが自筆で書いています**」とある通り、パウロの自筆の手紙です。当時手紙は、口頭筆記がほとんどでしたので、その意味で

はパウロが特に思いを込めた手紙といえます。この手紙でパウロは、奴隷オネシモについて、主人であるフェレモンに「**奴隷以上の者、つまり愛する兄弟として**」接してほしいとお願いをしています。

パウロは第一コリントにおいて、キリスト者になり、また自由な身分になれるとしても奴隷は奴隷のままでいなさいとも語っています（コリント一 7:21）。そこにみられるのは、地中海世界の社会制度としての奴隷制度を、改革しようという考えはなかったということです。しかし、パウロは、わざわざこの手紙をフィレモンに宛てて書いて、オネシモのことを強くお願いしています。奴隷制度を根本から変えるようなことはお願いしていません。ただ、奴隷には主人がいます。その主人は、その奴隷を自由人として解放すること、あるいは、奴隷のままであっても、同じ人間として極力接することはできます。パウロは、主なる兄弟姉妹となって以上そうなってほしいと願っているのです。

このパウロの願いは、教会の最初のありかた、あるいはなぜキリスト教が急速にローマ社会に浸透したかということにも関っています。ローマ社会に浸透したキリスト教は、当然イエス様のあり方と同じように人間を分け隔てすることなく交わりを持ったと思います。物理的にはまだ建物はなかったとしても、教会という交わりの中で共に食事をし、聖書を学び、祈っていました。そこでは社会で区別される男女も主人奴隷の関係もなかったのです。

現在コロナ禍のため、教会は、共に食事をすることすら行えない事例が多いのですが、聖餐式を大切にしようとする思いは、そのような食事を大切にする思いにもつながります。

当時の世界の秩序は、違いを超えてともに食事をするということを意図的に否定します。違いを超えて一緒に食事をしないことが、守るべき秩序でした。そのような中で教会は、ともに食事をするということを通して、週に一度、社会でどのような区別・差別を受けている人であっても、人間として受け入れられる時間と空間を示したのです。主と仰ぐ、イエス様がそうなさったからです。

パウロの願いは、主人であるフィレモンに、どうかオネシモとの関係において、その教会での交わりの時間と空間を少しでも増やしてほしいというものであったと思います。それは社会を変えるほどの強い主張ではありませんが、イエス様の示した救いの道とはそのような道であると語っていると思います。

本日の福音書で、イエス様は、父母を初めとして、日常的にあるいは常識的に考えて、大切なものを憎むようにと命じています。この言葉だけを、単純に普遍的にとらえて、毎日の生活の指針にしてしまっては、ただ家庭や社会に混乱を起こすだけでしょう。それは、イエス様がこれらの言葉を語った

意図とは思えません。また、そのイエス様の言葉を受け、保存し、このように福音書の中で語り続けている教会の一とも異なると思います。

しかし、もし常識という事柄による判断、あるいは秩序を守るということの意味が、主人と奴隷という極端な人間関係を含めて、誰かが苦しんでいる時間と空間をつくり出すのであれば、それを守ることは、決して本当の命に至る道ではないということです。

使徒書で触れた通り、当時の地中海世界の常識あるいは秩序は、人を分け隔てするものでした。それは、イスラエル・ユダヤにも影響していました。それは、主なる神様を信じる集まりである、イスラエル・ユダヤの本来の姿ではありません。また、イスラエル固有の食事における区別もありました。だからこそ、イエス様は、このような極端な言葉で、イスラエル・ユダヤが歩むべき道を示しているのだと思います。単に常識と秩序を破ることを命じているのではなく、常識と秩序を超えて、誰かが一方的に苦しみを担うような関係ではない世界を作ることです。そもそも、それが主なる神様の望む、「良し」とされた、愛に満ちた世界であるからです。

主なる神様の求める愛に満ちた世界、そのような世界の実現のためイエス様の命じたことは、単純でした。その一つが、だれでも生きている限り必ず行う、食事という行為を、ともに行うということです。そして、誰でも生きている限り迎える死を、それが終わりではないと信じることです。さらに、天地創造の初め、あるいは「申命記」にすでに見られたように、主なる神様がわたしたちを愛してくださっているから、その主なる神様を、いま自分と一緒に住んでいると隣人とを同じように愛することです。教会とは、これらの三つを具体化する集まりに他なりません。パウロは、イエス様に出会ったことはなかったと思いますが、復活のイエス様を通して、教会についてのこのことを学んだのだと思います。

明日、わたしたちは大切な信仰の先輩、友を天国にお送りすることを通して、ともにイエス様の教え、教会の信仰を改めて確認します。その信仰が、主なる神様の愛に満ちた世界の実現につながるものであることを、確認するのです。現在、コロナ禍の影響で、教会の在り方、あるいは教会の宣教の在り方が問われていると思います。教会とは何かが問われています。しかし、コロナ禍の終焉とともに、何事もなかったかのように元に戻る可能性もありますが、新たな歩みが始まることもあるかもしれません。ただし、教会が教会である限り、一人ひとりが一人の人間として受け入れられ、大切にされる世界の実現を目指して歩み続けることは変わらないと思います。わたしたちのその歩みの先に、主の御心にかなった世界の実現がある。そのことを信じ、これからも歩み続けたいと思います。